

第15話 平氏の衰運

焦燥、憤怒の中に清盛が俄かに薨じて、平家の威望はいよいよ落ちる。

第81代安徳天皇の治承5年閏二月四日に、平清盛が薨じた。高倉上皇がお崩れになってから約50日の後でした。

行家が尾張に起つ

この50日の間にも、諸国の源氏が兵を起こした知らせは、引き続いて到着した。鎌倉の頼朝、木曾の義仲はいうまでもなく大敵だが、この外にもまだ、小さな敵がそこにもここにも頭を擡げた。1月24日の夜の10時頃には、尾張の国の早馬が六波羅に駆け付けた。先に以仁王のお使いとなって令旨を伝えてまわった源行家が、東国の兵数千騎を率いて尾張に討ち入り、今、国内を荒らしている。これより美濃、近江を討ち従えて都に攻上るとの事です、と注進して来たのです。平家の一門はこの知らせに全くあわてて、今にも源氏が都に攻め込んで来るような騒ぎを演じました。

しかし、この時はまだ清盛が采配を揮っていたので、何の行家などがと、直ぐに子の知盛を大将としてその追討に発向させた。この時、行家は美濃の板倉というところに立て籠もっていたが、その勢は僅かに1,000余騎に過ぎなかったのに、平家は5,000余騎の多勢でしたから、忽ち攻め落とされて中原というところに退いた。平家は進んで尾張の墨俣川に陣を取ったが、間もなく大将の知盛が病気に罹ったために、あわてて兵を返して都に上ってしまった。

源氏の徒党が諸国に起こる

折角勝った軍にも、こうして先には進もうとしなかった。又、その頃、越後の豪族、城太郎資永を越後守に任じて義仲を討たせることにしていたが、これもはかばかしくは合戦もしなかったもので、関東から北国にかけては、日に増して源氏の威勢が盛んになるばかりでした。

2月に入ると、河内や紀伊にも源氏の徒党が起こり、更に又、平家が最後の根拠地としていた九州や四国にまでも源氏の身方が起こって、兵を挙げたという知らせが来た。清盛はこの形勢を見て頻りに心を苛立った。殊に平家の兵の余りに意気地のないのを真っ赤になって怒ったので、ついに嗣子の宗盛が、今度は自分が総大将となり、特に頼朝追討の院宣を賜って、東国に出発することにした。

清盛が熱病に罹る

それは治承5年2月27日の事です。宗盛を総大将とする数万の兵は、一切の準備を終わって、既に打ち立つばかりとなった時に、俄かに清盛が病気に罹って、その出発は止められた。その病気がまた一通りではなかった。病みついた日から湯水も喉へ通らず、体の熱い事は火を焚いているようで、寝ている所から2,3間(一間は1.8m)の内は、暑くて、人々には近付けなかったといわれます。わざわざ比叡山から清水を汲下ろして、石舟に湛えて、それに入って冷やすと、水は忽ち湧き上がって湯となるし、上

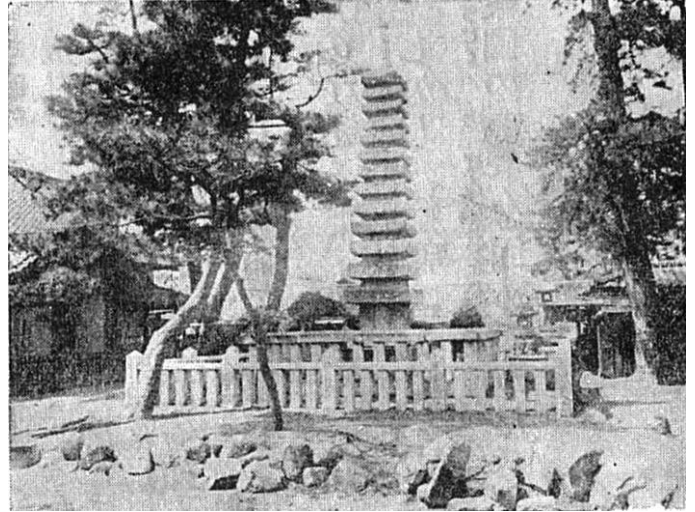
第15話 平氏の衰運

から 笥の水をかけると、石や鉄などの焼けたように、水が跳返って寄りつかない。 たまに当たった水は炎となつて燃え上がり、黒煙が家中に充ち満ちて、炎は渦を巻いて上がったともいわれる。

よもや人間の体にこのような高い熱があろうとは思われないが、久しく無道の限りを尽していたのを人々が憎んで、こんな風にまで誇張して言い伝えたのであろう。 しかし、熱病に罹った事は本当なので、ただ、「あついあつい」と呻く外には何もなかったということです。

清盛の遺言

閏2月2日になると、逆も助かりそうになかった。 妻の時子が熱いのを我慢して、枕元に寄つて、ご遺言はというと、清盛は苦しげな吐息をつきつき、「今さら思い置くことはないが、ただ一つ、頼朝の首を見ずに死ぬのが残念だ。 自分が死んだ後は、堂や塔は造るに及ばず、又、供養をするにもおよばない。 ただ頼朝の首を斬つて墓に供えてくれ」といって、その4日に、ついに64才で薨じた。 病みついた日から7日目でありました。



兵庫の清盛塚
(清盛の遺骨を埋めた地と伝えられる)

清盛が死ぬと、平家の威望はいよいよ落ちた。 宗盛は父が死んだために、今は自分が京都を明けるわけには行かなくなったから、弟の重衡、甥の維盛らを大将として東国に発向させた。 この平家の軍が7,000余騎で、尾張の墨俣川まで下って行くと、その東の河原に、源行家と頼朝の弟の卿公義円とが各々千余騎を率いて陣を張っていた。 卿公義円は、義経のすぐ上の兄で、幼名を乙若といったものです。 京都で坊さんになっていたが、頼朝が兵を挙げたのを聞いて、鎌倉に下ったのでした。

平家の軍、行家を破る

さて平家が西の河原に陣を取ると、その夜、源氏は平家の不意を襲うつもりで、密かに夜討の用意をしていた。 ところが、それを平家に知られて、却って逆襲されたために、義円は戦死し、行家は残兵をまとめて、やっと三河の矢作川まで逃げて来た。

平家は勝ちに乗ってここまで追って来ましたが、行家の計略にかかって、東国の大軍が潮の如くに押し寄せて来るという噂を聞くと、それが嘘か真かをも確かめもせず、あわてて京都に引き返した。 それほどまでにも、彼らは東国の源氏を恐れていたのです。

しかし、頼朝はまだ容易には進んで平氏に向おうとはしていなかった。 彼は悠々と東国の地盤を固めていました。

(第15話 平氏の衰運 終わり。 次は前頁に戻り、第16話 源氏の北国進出 へ)